

かはら 加原遺跡

所在地 新城市大宮字加原地内
(北緯34度55分37秒 東経137度31分24秒)

調査理由 第二東海自動車道横浜名古屋線

調査期間 平成20年6月～平成20年11月

調査面積 2,000㎡

担当者 酒井俊彦・永井邦仁



調査地点 (1/2.5万「三河大野」)

調査の経過 発掘調査は第二東名高速道路建設工事の事前調査として愛知県教育委員会を通じた委託事業である。連吾川右岸の調査対象地を東から順に08A・B区として実施した。

立地と環境 遺跡周辺は、天正3(1575)年の長篠・設楽原合戦で織田・徳川連合軍と武田勝頼軍が激突した決戦場跡として知られている。連吾川の右岸は連合軍の陣地があったと推定されている。岩座神社遺跡のある河岸段丘(標高100～115m)の東側斜面下には連吾川がつくる谷地形が広がり、段丘裾に緩斜面(標高82～84m)がある。遺跡はその緩斜面に展開する。

調査の概要 08A区では、河川堆積による砂礫層上で古墳時代前期の遺物を包含する黒色土が堆積する一辺約12mの方形の落ち込みが検出されたほかは顕著な遺構はなかった。一方08B区では、砂礫層上に堆積する通称黒ボク土層の上面およびその中で2つの検出面を設定することができた。上面では12～13世紀の遺構、下面では10～11世紀の遺構が検出した。また遺構を伴わないものの、縄文時代後～晩期の石器や土器、古墳時代前期の土師器、7～8世紀代の須恵器と土師器が確認された。なお、長篠・設楽原合戦時に限定しうる遺構や遺物の検出はなかった。

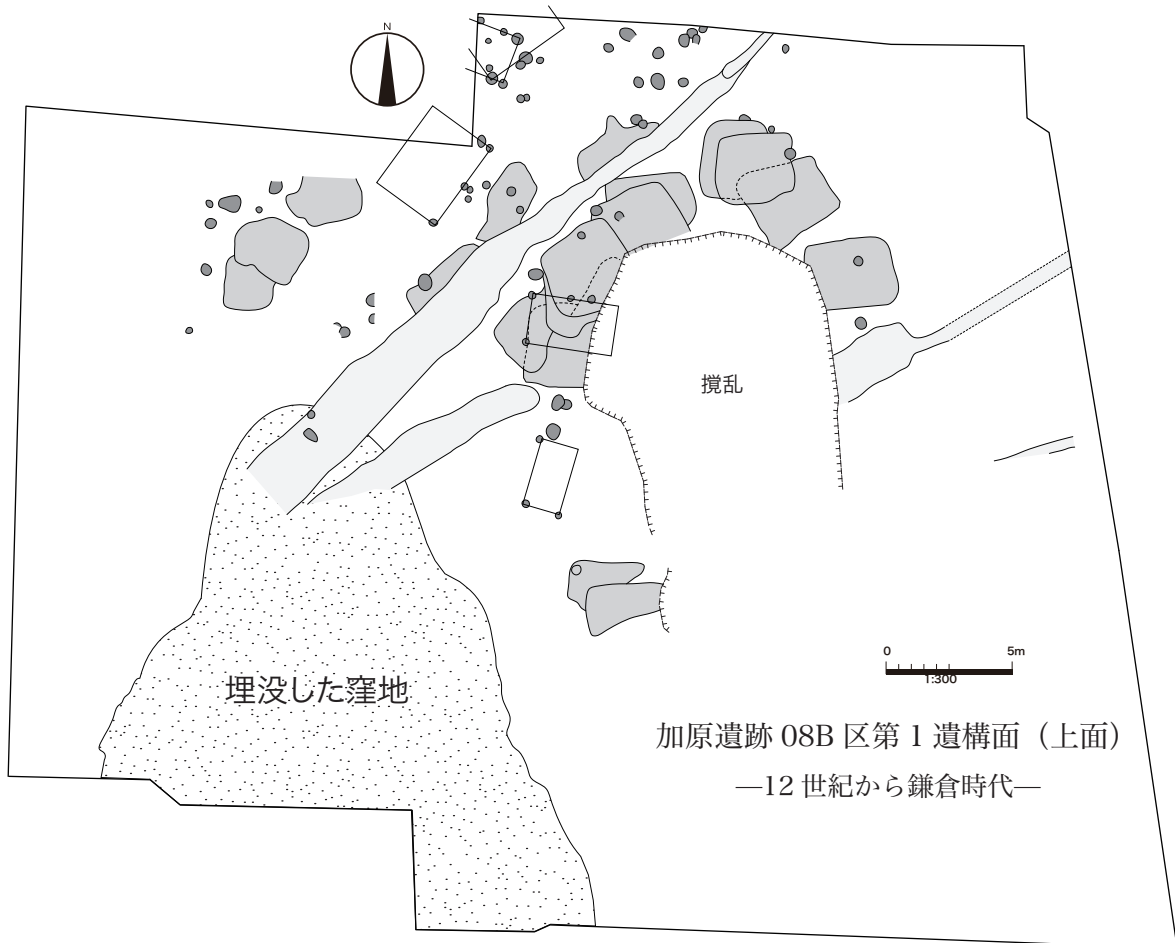
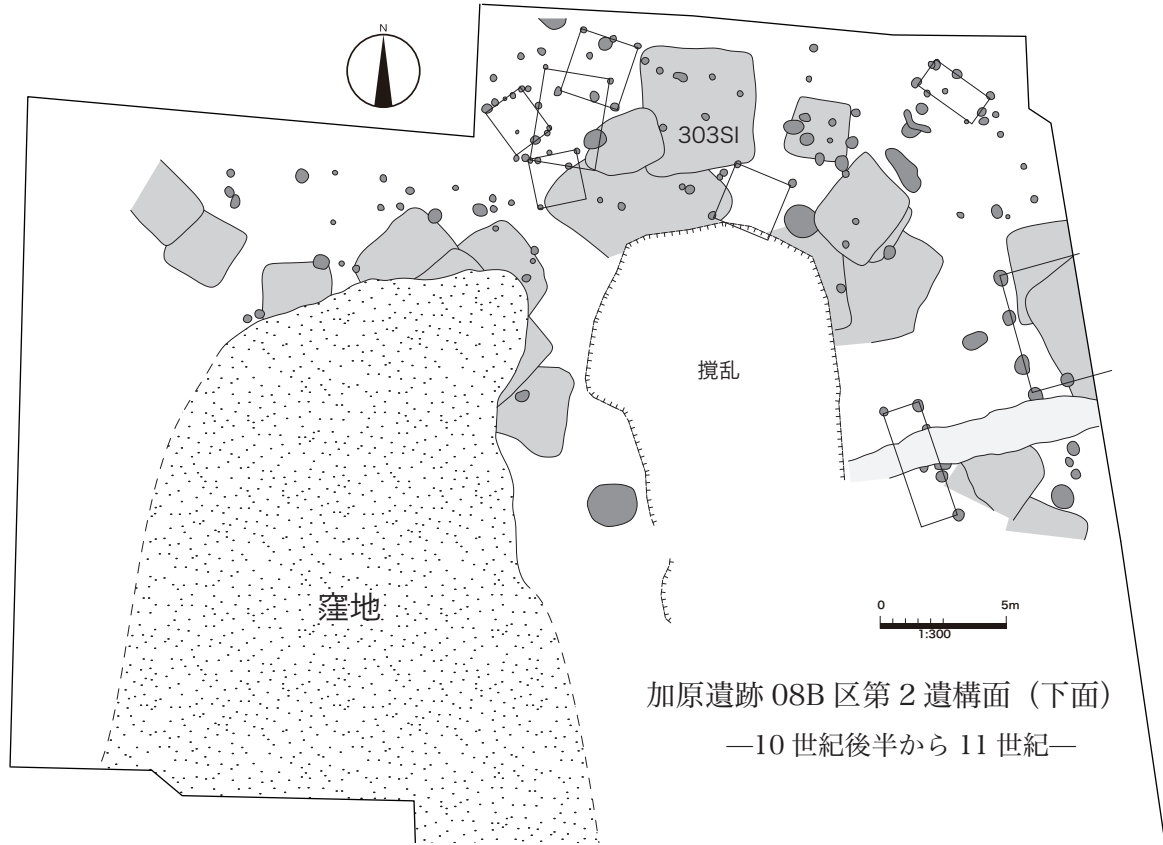
平安時代の集落 主として竪穴住居で構成される集落である。一辺が約5mのものと約3mのものがありいずれも10世紀後半の灰釉陶器が出土する。前者(303SI)は竪穴底面に幅約80cmの周溝状掘り方が認められる。火処は確認されなかった。遺構の重複関係で比較的新しい時期と判ぜられる竪穴住居跡からは11世紀代の灰釉陶器も出土した。

鎌倉時代の遺構 集落の南側には東西方向の小谷があり、それに面して東西25m×南北17m規模の窪地がある。窪地堆積土層からは12世紀代の山茶碗と土師器鍋が多数出土した。鍋は清郷型と称される厚手のナデ調整のものである。堆積土層上および黒ボク土層上面では、浅い皿状をした竪穴状遺構と溝、多数の柱穴が検出された。ただし13世紀以降の遺物は極端に減少する。

信濃由来の土師器椀 窪地堆積土層からは12世紀代の白磁碗や9世紀後半の緑釉陶器、土錘や鉄滓などの注目される遺物が出土した。特に信濃地域からもたらされたとみられる土師器無台椀は、当該地域との交流をうかがい知る貴重な発見であったといえる。(永井邦仁)



平安時代の竪穴住居跡303SI



加原遺跡08B区遺構配置図